

## マルチアキシスのダイバーシティに向けて

ダイバーシティ推進センター 吉田祥子

ダイバーシティ推進センターが2020年に発足して足掛け4年、本年より学部3年生対象に学術素養講義のDiversity Tech概論も始まっている。そこから見えてきた本学学生のダイバーシティの現状とあるべき支援の方向性についてレポートしたい。

### 1. 本学のダイバーシティの取り組み

日本では、1986年の男女雇用機会均等法の施行、1999年の男女共同参画社会基本法の施行という歴史的な経緯<sup>1</sup>から、多様性の推進は女性の権利拡大と捉えられる意味合いが強かった。本学においても、これらの事業は2011年の男女共同参画推進室設立としてまず始まっている。これに並行して、2010年代にLGBTQ+の世界的潮流が押し寄せ、多様性とは「性のスタンダードではない人たち」の話であるような見方も生まれていた。性的指向と発動に注目が集まった時期でもあった。

本学ではこの10年、女子学生と女性教職員の著しい増加が見られ、彼らをサポートする施策の重要性はいや増している。同時に各種の教育講演を通じてLGBTQ+への理解も醸成されているかと思う。しかし、現在のダイバーシティ概念はさらに多様で多くの軸を内包するようになった。特に本学には、従来型のダイバーシティ施策からこぼれている大きな二つのダイバーシティグループが存在する。留学生と、ニューロダイバーシティグループである。

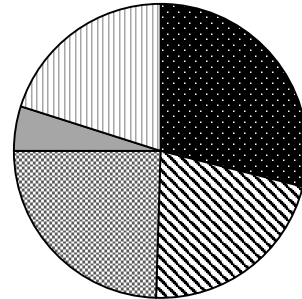
本学の留学生には入学前、そして入学後、日本語を学ぶ学生が多く、表面的には大学に馴染んで研究に邁進している。その一方で、留学生に対しまだまだ隠れた情報共有上の障壁があることも否めない。この障壁は外国籍の教員に対しても同様に存在する。大学から教員への指示は無意識に「日本語話者」であることを前提にしており、等しい情報提供が行われていないケースが見受けられる。近年、大学からのメール連絡や緊急情報のアナウンスが英語併用となったのは、大きな改善だったと考えられる。ダイバーシティ推進センターでも、昨年webページの英語化を進め、今年度のダイバーシティ推進学生の申請書には英語版を作成した。本年度推進学生に採用された留学生が、日本人学生との架け橋になってくれることを大いに期待している。

ニューロダイバーシティは、はじめて聞く方も多いのではないだろうか。一般的には発達障がい等に含まれる、不安神経症、自閉症スペクトラム、注意欠陥多動症候群(AD/HD)などを、障がいや疾病として捉えるのではなく、精神活動の多様性として認識するものである。いくつかの報告では、大学生のニューロダイバーシティ比率は高く、2022年に日本学生支援機構がまとめたものでは教育機関の80%に発達障がいを含む障がい学生が在籍しているとされる<sup>2</sup>。これは、身体障害者手帳を既に持っているという学生を対象とするもので、グレーゾーン学生はさらに多いと考えられる。特に理系、物理・数学を専攻する学

生に有意に高値とされる<sup>3</sup>。従来言われるよりは男女差は小さく、やや男性に多い<sup>4</sup>。

## 2. ダイバーシティの講義から見えること

本学では本年度、ダイバーシティ推進の教育活動の一環として、大学一年生の工学概論で1コマ、および大学三年生(一部博士前期(修士)課程学生)の学術素養科目に Diversity Techを8コマ、開講した。Diversity Techは帯講義であり、技術開発につながる講義になるように、学内の教員および企業の研究者の協力を得て講義を実施した。受講者は192名(確定数)、内訳を図1に示した(それぞれ1系 機械工学課程、2系 電気・電子情報工学課程、3系 情報知能工学課程、4系 応用化学・生命工学課程、5系 建築・都市システム学課程)。



■ 1系 □ 2系 ▨ 3系 ▩ 4系 ▪ 5系

図1 DiversityTech概論受講者の分布

講義内では、学生自身が内包する問題についてのアンケートを行った。アンケート内容を表1に示す。学生からの回答結果を見ると、26%の学生が自身のAD/HD傾向を自覚していることがみられ、その自覚には専攻による偏りも見られた。SNSの発達を背景に、コミュニケーションの得手不得手が各自にとって鮮明になっていることも背景にあると考えられる。半数以上の学生が「オタク傾向がある」と回答しており、AD/HD傾向は興味のあることに集中するなどエンジニアの特性と相性が良いことも考え合わせると、本学の学生が悩むことなくエンジニアとして伸びていける環境を構築する必要がある。

下記のうち、自分に当てはまると考えられるものをすべて選べ  
Select all of the following that you believe apply to you

- オタク気質. Geekiness
- 友達が多い I have a lot of friends.
- スポーツが好き I like sports.
- 突然不安になる Suddenly I get anxious.
- 落ち着きがない restless
- ひとの話を聞かない I don't listen to others' opinions
- 性自認に不安がある I have concerns about my gender identity.
- 夜寝られない/朝起きられない Inability to sleep at night/unable to get up in the morning
- アレルギーがある I have allergies.
- ご飯はいっぱい食べる I eat a lot of food.
- ADHD かもしれない/ADHD と言われたことがある I may have ADHD/ have been told I have ADHD

表1 受講者への講義内アンケート

一方、うつや不安神経症は、本学の学生に見られる傾向のひとつである。アンケートでは、不安感を感じている学生が50%、睡眠障害を感じている学生が41%だった。講義アンケートは心理カウンセリングとは異なり、また厳密な定義を持って問いかけているわけで

はない。学部3年生で、新しい環境にきたばかりの学生を対象にしていることを考えると、ごく自然な回答であろう。しかし一方、睡眠障害を感じている学生の中には、うつや神経症などの疾患の萌芽を抱えている学生がいる可能性もある。

そこで、回答の相関解析を試みた。近年の神経科学では、うつの前段階として血管内皮の疾患、アレルギーを提起している<sup>5</sup>。アレルギーがあると回答した学生は25%いるが、睡眠障害とアレルギーのどちらにも回答した学生は全体の11%だった。またアレルギーを持つ学生の43%が睡眠障害を申告している。睡眠障害、アレルギー、AD/HDの自認を併せて持つものは全体の4%で、この群の学生は、必要に応じてカウンセリングなどに繋げていくことができればと考えている(図2)。

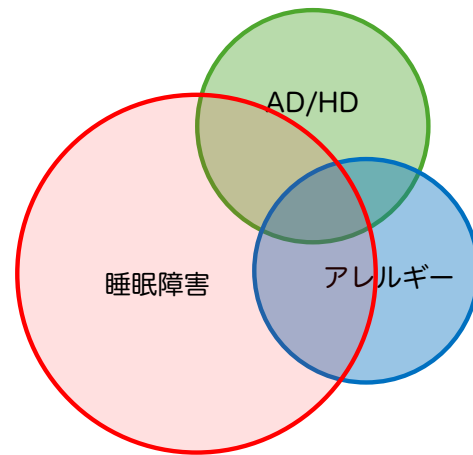


図2 睡眠障害・アレルギー・AD/HDの相関

### 3. 性自認とダイバーシティ支援

学生アンケートではある程度の学生が性自認に不安を抱えると回答した。日本には約8.9パーセントの性的マイノリティに属する人がいると言われ<sup>6</sup>、左利きの割合くらいとされるが、母集団によってこれは大きく変動する。当事者がもし悩んでいるなら、カウンセリングやサポートの体制を充実する必要がある。しかし同時に、教員を含む周囲の言動に、「性的標準化バイアス」が潜むことにも注意する必要がある。性自認の揺らぎを「治療」に結びつけようとすることは、その人本来の状態を否定する行為であり、conversion therapyとして忌避される。さらに相談を受けた教職員が、個人が特定できる形で「問題の共有」を図ったりすることはアウトティングにつながり、当事者を意味なく追い詰めることになる。個人情報が無意識に共有しないよう、他者の情報の取り扱いには細心の注意を払う必要がある。

### 4. ダイバーシティと技術提案

この講義では最後に、ダイバーシティ技術(ジェンダード・イノベーション)を提案することを課題とした。プレレポートで学生が提出したアイデアに教員からコメントを加え、さらに学生の推敲を経て提出してもらうのだが、いくつかはハッカソンに提案可能なレベルの技術提案となった。情報系の学生は、高専ですでに人工知能や機械学習に触れており、それを元にした情報処理レベルの提案が多く見られた。機械系、電気系の学生からはものづくりに立脚した提案が見られた。「独創的な技術提案」という課題に対する戸惑いを見せた学生も多く見られ、技術開発に必要な条件である、必要性・独創性・実現可能性を柱に、大学三年生の若い年齢からダイバーシティに触れ、考え、技術に昇華する教育

の重要性を、教える側も大いに考えさせられた。

#### 5. 性差と社会の中のダイバーシティ

最後に、社会の多様性の第一歩の問題である科学技術領域での女性進出と活用について述べたい。2024年度のNHK朝の連続テレビ小説では、法曹界への女性先駆者を取り上げていた。分野は異なるが、科学技術分野の女性先駆者とも重なる点が多かったように思う。脚本の秀逸であった点の一つは、女性先駆者がその分野に進出し認められるに伴って「名誉男性」化を示すあたりだろう。

反省とともに述べるが、社会が従来のスタンダードを変えことなくニューカマーを受け入れることは、ニューカマーに歪みを強いる。スタンダードに適応すれば「名誉従来型」となり適応できなければ脱落感を生じさせる。これは単に女性の社会進出にとどまらず、性的多様性にもニューロダイバーシティにも当てはまることだろう。工学の各分野で女性が働くようになり、本学でも女子学生の獲得と増加が進んでいる。彼女たちの将来に、「女性だけれど」ががんばっている、と言われる未来は相応しくない。同時に、支援を受けなければ独り立ちできないような存在であることも嬉しくはない。そこにある「個人」を評価すること、すなわち多様な価値の軸を内包する大学であることが、ダイバーシティ推進センターの目標となる。

最後になりますが、Diversity Tech概論の講義の創設にご尽力いただいた足立忠晴先生、講義を担当いただいた本学松尾幸二郎先生、NTT先端集積デバイス研究所田中雄次郎様、資生堂未来研究所小倉有紀様、ダイバーシティ推進センターの角田センター長、沼野副センター長、センター実務を担当いただいている人材育成推進室他ご関係の皆様の協力に心から感謝いたします。

#### [参考文献]

- 1) 内閣府男女共同参画局ウェブサイト
- 2) 日本学生支援機構 令和3年度(2021年度)大学、短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査
- 3) 若林明雄 自閉症スペクトラム研究 (2003) 2(1), pp.11-20
- 4) Adachi Y, et.al. PLoS ONE (2020) 15(8): e0218357.
- 5) Nakagawa Y, Chiba K. Pharmaceuticals (2020) 15(8), pp.1028-1048
- 6) 日本財団リポート「LGBTQなど性的マイノリティを取り巻く問題。私たちにできること」(2022)

